「復興五輪」への疑問

写真は建設中の新国立競技場を背景に立つ真山仁さん。「金をかける意味、哲学がそこにあるのか」。朝日新聞 8 月 9 日朝刊の標題「真山仁の Perspectives:視線」に注目した。東京五輪なるものに関心があり、同感することも多く、抜粋して紹介したい。

東京が開催地に決定した 2013 年から、なぜ、今さらオリンピックなんだ、とずっと疑問を抱かせた東京五輪まで、ついに 1 年を切った。最終選考の際に、福島第一原子力発電所の汚染水について「アンダーコントロール（統御されている）」というとんでもない演説をした安倍晋三首相に怒りを覚えた。

なぜ今さら、五輪なのか―。開催地が決まった後の国会で、安倍首相は「復興五輪」だと言い切った。だが、そんな気配はどこにも感じられない。聖火リレーが福島から始まるそうだが、それを復興だと言うのなら、お笑いぐさだ。そもそも 11 年の震災から 8 年半を過ぎたのに、いまだ震災復興というスタンスに違和感がある。東日本大震災以降も、日本は毎年のように大災害に見舞われて、各地で甚大な被害をもたらしている。もし、本気で復興五輪を掲げるならば、それこそメインスタジアムは、被災地にあるべきだろう。五輪を東京に誘致したかったのは、成長戦略がずっと空回りし、元気のない日本にカツを入れるための起爆剤にしたかったからと私は理解している。

五輪は分かりやすく言えば、国際運動会だ。世界中から集まったアスリートが覇を競う。五輪が、国際運動会であるなら、一つでも多くの世界記録が生まれるような環境を提供するべきだ。例えば、酷暑の炎天下に競技を行うことを断固として IOC に抗議して変更を求めてもよかったのではないか。64 年の東京五輪が 10 月開催だったのは、日本の夏の暑さが考慮されてのことだった、のではないのか。一説では、五輪の収益を支えているのは放送権収入で、その大部分は米国の放送局である NBC が支払っており、NBC が夏開催を望んでいるからそのようになるとも言われている。

近年、日本の行動には、表層的で付和雷同的な浅薄さが目立つ。その結果、哲学や美意識がなくなった気がしている。今回の五輪も、そう思えてならない。誰も五輪をどう捉えるのかという視点で語らない。世界から来るアスリートへのメッセージも見当たらない。ただ、政府や組織委員会などが、官僚的な取り決めを進め、時間だけが過ぎていく。それでも、きっと来年の 7 月 24 日に東京五輪が開幕すれば、日本中が五輪に熱狂するだろう。なにしろ、五輪が北京であろうが、ロンドンであろうが、リオデジャネイロであろうが、皆、徹夜してでも競技に釘付けになる国民なのだ。

しかし、それでも問いたいのだ。何のための五輪なのか、誰のための五輪なのか、そして、そのために、あなたは何が出来るのか、と。

（2019 年 8 月 20 日）